

異世界ダンジョンで最深部を目指したら出会いがあるのは間違いな
い

あやふやな真実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なろう系異世界ダンジョンついたらこの作品。

その主人公をぶち込んでみる。

洗脳されることに定評がある理不尽なまでに我等が主人公なカナミさんを、原作のハードモードじゃなく極普通にチートさせてあげるテスト。

尚、妹様の手の平の可能性も有り。

ベル君は多分出てこないので悪しからず。

目次

第1話

眩しい。

底抜けに明るい鮮烈な白に塗りつぶされ、開けない瞼越しに光を感じる。

次に気づくのは、その匂い。鼻奥に浸透する「生」の香り。呼吸から体中に澄み渡っていくかのような心地よさを実感する。

僕はその安心感に身を委ね掛け、しかしその誘惑に抗って少しだけ目を開けて体を起こす。

「……？」

その視界に飛び込んできたのは、眩しく反射する金の髪色。

まるで後光が差すかのように、はつきり発光する整った顔立ちのその、ガラスのような澄んだ瞳がこちらを覗き込んでいた。

あまり働かない意識で完全に体を起こし、頭を動かして辺りを見回すと、僕は石造りの仰々しい空間で、見知らぬ人物に膝枕をされていた、ということが伺えた。

唐突で現実感の乏しい状況にぼんやりと辺りを『観察』することで、何やら小さな祭壇のようなものが並ぶここは大雑把に『祭壇』であるらしいことを理解した。

好きだったゲームの画面越しにはよく見知った、だけど現実ではあまり見ない「それっぽい」雰囲気飾りのついた小さな蠟燭台と二本の燃えた残りかす。何かの見慣れない生き物の皮らしきものが、供えられるように添えられた作り物には見えない西洋剣にみえるもので地面に突き刺さっている。

「なにこれ……」

「■■■■？ ■■■、■■■■……■■■■？」

僕は呟いた。

独り言として零したそれは、考えることを放棄していた傍らの人物に受け止められて何らかの意思の伝達を果たしたようだった。

「■■■■、■■■■？ ■■■■■。■■■■」

「……意味がわからないよ」

目の前の人物——金髪の非常に美しい少女の言葉もそうだが、この状況に理解が追いついていなかった。

聞いた感じ、英語などの自分の知っていきそうな言語ではなさそうで、いつの間にか収まっているさっきの発光現象などから、この少女が天使か何かである、とかの非現実的な妄想の類であるという考えが一番しっくりときてしまうぐらいであった。

未だに夢から覚めていないのだろうか？

けれど、それにしても意識も実感もはつきりしすぎており、かと言つてここは見慣れた自室からはかけ離れていて、眠りに付いていたはずのベッドも、毎朝夢から叩き起こす目覚まし時計も、無機質な電気の明かりも、ない。

思い出すと恥ずかしい気持ちがかみ上げてくるが、あるのは先ほどまで枕としていた柔かいふとももの感触と、こちらを気遣うことを意図した呼びかけと、馴染みがない不規則な蠟燭に灯された火の照らす明り。——と、先の謎の発光もか。

まず、ここはどこで、君は誰なんだ……。

——ステータス

場所 迷宮

名前 アイズ・ヴァレンシユタイン Hぢ ■ d x / ■ 8 Eい j P

■ / l ■ g h う ク ■ s ゆ 剣士

「……………え？」

思考に答えたかのように、突然何かの『表示』は僕の視界に浮かぶのであった。